過去のいじめに関する経験が大学生に与える影響

Effects of Past Bullying and being Bullied Experiences on College Students

伊丸岡 俊 秀^{※1}
Toshihide IMARUOKA

松 本 圭^{※1}
Kei MATSUMOTO

鶴 谷 奈津子^{※1}
Natsuko TSURUYA

石 川 健 介^{※1}
Kensuke ISHIKAWA

渡 邊 伸 行^{※1}
Nobuyuki WATANABE

近 江 政 雄^{※1}
Masao OHMI

1. はじめに

文部科学省によると、平成25年度の全国の小中高および特別支援学校におけるいじめの認知件数は18万5千件以上であり、いじめが認知された学校の割合も小学校で48%、中学校では65%、高校でも56%と非常に高い¹⁾。

いじめに関係する経験は、不登校や問題行動のきっかけになるという行動面での影響のみならず、児童・生徒に対する心理的な影響も大きいとされる。中学生を対象に、直近の学期におけるいじめに関わる経験とストレス症状を調査した研究では、いじめ被害は身体的反応、抑うつや不安、不機嫌や怒り、無気力といったストレス症状を高め、いじめ加害も不機嫌、怒りや無気力のストレス症状を高めることが分かっている²⁾。同様に海外の研究でも、いじめ加害、被害のいずれも抑うつや不安といった心的な問題のリスク増大をもたらすことが報告されている³⁾。

いじめに関わることは即時的な影響だけでなく、青年期にまで至る長期的な影響をも引き起こすことが、過去の縦断的研究によって示されている。Souranderらは8歳時のいじめ加害、被害経験が与える長期的影響を調べ、いじめ加害が青年期における反社会的性格特性、薬物濫用、抑うつ、不安障害を、いじめ被害が不安障害を、さらに加害と被害両方を経験することが反社会的性格特性と不安障害を予期すると報告した⁴⁾。また、van Oortらは思春期前における環境や経験が、その後の不安状態に対して与える影響を同一の対象に対する3度に渡る調査を実施することで調べ、思春期前にいじめの被害を受けた児童が長期にわたって高い不安を示すことを報告している⁵⁾。さらにCopelandらは幼少期や思春期におけるいじめの加害経験および被害経験が成人後に精神疾患を発症する可能性を高めることを示した⁶⁾。

このようないじめに関わる経験による長期的な影響が、大学生の学生生活や修学に影響を与える可能性は

十分に考えられる。ChenとHuangは約1,400人の大学生を調査し、過去あるいはその時点ではいじめ被害経験が健康に関するQuality of Life (QOL)に与える影響を調べた。その結果、過去から学生時代に渡る言語的、あるいはインターネット上のいじめ被害が社会的な関係に関わるQOLを下げることが示された。ただしこの研究では精神的QOLはいじめの影響を受けていなかった⁷⁾。またHoltらは過去のいじめ被害経験が大学生の精神的、および身体的健康に与える影響を調べ、いずれも低下することを報告した⁸⁾。

比較的幅広いタイプの生徒で構成される小学校や中学校に比べて、学業成績の面でも専門分野に対する志向の面でも一定の選択が行われた結果として構成されている大学では、いじめの影響の現れ方もそれぞれの学校の特性によって異なる可能性がある。そこで本研究では、日本の工科系大学に所属する学生の、過去のいじめに関する経験の有無と現在の精神的疲労および精神健康を調査し、その関係を検討することとした。

2. 方法

2.1 対象者

地方工科系大学に所属する大学生121名（男性89名、女性32名、平均年齢 19.1 ± 1.2 歳）を対象として調査を実施した。

2.2 質問紙

過去のいじめに関する経験の調査には、筆者らが作成した「これまでに経験したライフイベントについての質問票」を使用した⁹⁾。この質問票は、勉学で誰かからほめられた経験などポジティブなものや、いじめを受けた経験、誰かをいじめた経験などのネガティブなものを含む10種類のライフイベントについて、その経験の有無を問うものであった。当該ライフイベントの経験があると回答した場合は、経験時期、ライフイベントに対する感情価、さらに内容の自由記述をそれぞれ求めた。ここで、ライフイベントとはHolmesとRaheの定義による「離婚」、「結婚」、「入学」、「卒業」などの生活上の変化、「配偶者の死」、「妊娠」などの家

2015年3月13日受付

※1 金沢工業大学

族成員の誕生や死,「法律違反」,「借金」などの大きな失敗,「転居」などの環境変化といった,現在の生活様式に大きな変化を要求する出来事を示す¹⁰⁾.これらのライフイベントは人間のストレスに大きな影響を与える場合があることが多くの研究で示されている¹¹⁾.

現在の精神健康を測定するために日本語版 WHO SUBIを使用した¹²⁾.この質問紙は世界保健機関により作成された検査で,陰性感情にあたる心の疲労度に加え,陽性感情にあたる心の健康度も同時に測定できるという特徴を持っている.質問は40項目からなり,それぞれに対して「非常にそう思う」,「ある程度そう思う」,「あまりそう思わない」の3件法で答える形式となっていた.心の健康度は19項目の合計点から求め,それに加えて満足感,達成感,自信,至福感,近親者の支え,社会的な支え,家族との関係の7つの下位尺度ごとの得点を求めることができた.それぞれ,得点が高いほど健康度が高いことを示す.心の疲労度は21項目の合計点から求め,それに加えて家族との関係,精神的なコントロール感,身体的な不健康感,社会的つながりの不足,人生に対する失望感の5つの下位尺度を求めることができた.それぞれ,得点が低いほど疲労度が高いことを示す.

2.3 手続き

大学の講義時間内に,研究への協力についての同

意が得られた学生を対象に集団で実施した.最初に SUBI,次にライフイベントについての質問票という順で,無記名式で回答してもらった.両方の質問紙にはID番号を振り,質問紙間の対応が可能となっていた.

3. 結果

ライフイベントについての質問票の結果から,対象者を過去にいじめ被害にあった経験と他者をいじめた経験の両方を持つ「いじめ被害・加害経験あり群」,いじめ被害経験はあるが他者をいじめたことがない「いじめ被害群」,いじめ被害経験がなく他者をいじめた経験がある「いじめ加害群」,いずれの経験もない「経験なし群」の4群に分類した.それぞれの群の人数と全体に対する割合を表1に示す.

表1に示したようにいじめに関する経験がない群がもっとも多かったものの,半数近い学生が過去にいじめ被害,加害,あるいはその両方の経験を持っていた.

つづいて,SUBIによって測定した現在の精神健康および疲労度を群別にまとめ,図1および図2に示す.

図に示されるように,いじめ加害経験のある群においては,いじめ被害経験による健康度,疲労度の違いがほとんど見られないのに対して,加害いじめ経験のない群ではいじめ被害経験の有無によって健康度,疲労度に差が見られる.

このような結果の違いについて詳細に吟味するために,それぞれの下位尺度得点を対象に,いじめ加害経験と被害経験を対象者間要因とした2要因の分散分析を実施した.その結果を表2および表3にまとめる.

分析の結果,被害あるいは加害経験の主効果に関しては至福感に対する加害経験と身体的な不健康感に対

表1 いじめ経験による分類 (人 (%))

		いじめ加害経験	
		あり	なし
いじめ被害経験	あり	11 (9.1%)	29 (24.0%)
	なし	11 (9.1%)	70 (57.9%)

図1 いじめ加害・被害経験が健康度に与える影響

図2 いじめ加害・被害経験が疲労度に与える影響

表2 精神健康度に対するいじめに関する経験の影響に関する分析結果のまとめ

	満足感	自信	至福感	社会的な支え
加害あり群>加害なし群				
加害あり群:被害あり>被害なし	△	○		○
加害なし群:被害なし>被害あり	△		△	△
被害あり群:加害あり>加害なし	○		○	○
被害なし群:加害なし>加害あり				△

○: $p<.05$, △: $p<.1$

表3 精神疲労度に対するいじめに関する経験の影響に関する分析結果のまとめ

	家族	精神	身体	社会	人生
被害なし群>被害あり群			△		
加害なし群：被害なし>被害あり		○		○	△
被害なし群：加害なし>加害あり		○		△	

○： $p<.05$, △： $p<.1$

家族：家族との関係；精神：精神的なコントロール感；身体：身体的な不健康感；社会：社会的つながりの不足；人生：人生に対する失望感

する被害経験が有意傾向を示したのみであった。

一方、多くの項目で加害経験と被害経験の間に有意な交互作用が認められた(精神健康度：満足感 $F(1,117) = 5.83$, $p<.05$; 自信 $F(1,117) = 4.02$, $p<.05$; 至福感 $F(1,117) = 3.49$, $p<.1$; 社会的な支え $F(1,117) = 9.11$, $p<.05$; 精神疲労度：精神的なコントロール感 $F(1,117) = 6.50$, $p<.05$; 社会的つながりの不足 $F(1,117) = 4.54$, $p<.05$; 人生に対する失望感 $F(1,117) = 4.25$, $p<.05$)。ここでそれぞれの F 値は、健康度や疲労度の各項目に対する、加害経験の効果と被害経験の効果の交互作用に関する統計量を示す。これらの値が、カッコ内に示される2つの自由度と一般的に5%あるいは1%に設定される有意水準(p 値として示している)から求められる臨界値を超えている場合に、加害経験と被害経験が独立ではなかったことを示す。すなわち、被害経験の有無によって加害経験による影響が異なっていた、あるいは加害経験の有無によって被害経験による影響が異なっていたということになる。

有意と認められた交互作用の詳細を明らかにするための単純主効果検定を実施した。まず、加害経験がある学生に限定すると、被害経験を持つことは満足感($p<.1$)、自信($p<.05$)、社会的な支え($p<.05$)を高くすることが示された。一方で加害経験を持たない学生に限定すると、被害経験は満足感($p<.1$)、至福感($p<.1$)、社会的な支え($p<.1$)を低くする傾向があることが分かった。つまり精神健康度のいくつかの項目では、加害経験の有無によって被害経験の効果が反転していたことになる。次に単純主効果検定の結果を被害経験別にみる。被害経験がある学生では、加害経験は精神健康得点を有意に高くしていた(満足度、至福感、社会的な支えともに $p<.05$)。一方、被害経験がない学生では加害の経験はあまり大きな効果を示さず、加害経験のない学生の方が社会的な支えを強く感じる傾向を示したのみだった。

精神疲労度に関しては、加害経験がある群に限定してみると被害経験の効果はなかった。加害経験がない群では被害経験は疲労度を高くする傾向がみられた(精神的コントロール感、社会的つながりの不足が $p<.05$ で有意、人生に対する失望感が $p<.1$ で有意傾向)。次に被害経験別にみると、被害経験がある場合には加害経験の効果は見られず、被害経験がない場合に

は加害経験によって疲労度が高くなることが示された(精神的コントロール感が $p<.05$ で有意、社会的つながりの不足が $p<.1$ で有意傾向)。

4. 考察

これらの結果から、工科系大学に所属する学生の精神健康および精神疲労は、過去のいじめに関する経験による影響を受けていたと言える。またいじめ加害経験と、被害経験は相互作用を示すことも示された。

4.1 他者をいじめたことの影響

本調査の結果、他者をいじめたことは現在の精神健康に対して全体的にポジティブな影響を与えていた。精神健康度において、被害経験の有無にかかわらず加害経験群で至福感が高くなる傾向があり、さらにいじめ被害がある群では加害経験も持つ群の方が満足感、至福感、社会的な支えの3つの下位項目で高い健康度を示した。いじめ加害による健康度に対するネガティブな影響はいじめ被害がない群において、加害経験が社会的な支えを低く感じさせるという結果のみであった。これらの結果はいじめ加害経験者の健康に関するQOLが高くなるという先行研究と一致するもので、いじめ加害経験者がしばしば示す社会性や適応性の高さを示すものと考えられる⁷⁾。

一方で現在の精神疲労度に関してはいじめ加害経験はどちらかといえばネガティブな影響を残していた。いじめ被害経験がない群ではいじめ加害経験がある学生の方が精神的なコントロール感を低く感じ、社会とのつながりの不足を感じていた。

本研究の結果は過去のいじめ加害経験が大学生の精神健康にポジティブな影響を与えていることを示したが、この結果は必ずしも典型的なものではない。多くの研究ではいじめ被害経験同様、いじめ加害経験も精神健康に悪影響を与え、特に被害と加害両方を経験することが影響をより深刻にすることが報告されている^{4), 6), 13)}。この結果の違いの原因として、いじめ加害のポジティブな影響を報告した先行研究⁷⁾と本研究が、いずれも大学生を調査対象としていることが挙げられる。これまで、過去のいじめ加害経験の悪影響として報告されているものは反社会性パーソナリティ障害^{4), 6)}、低い職業機能¹³⁾といったものであり、そのような傾向を持つ場合には大学進学という進路を選ばな

いことが考えられる。結果として大学生のみを対象とした調査では、いじめ加害経験のネガティブな影響が捉えられないのかもしれない。

4.2 他者にいじめられたことの影響

先行研究から予測された、いじめ被害経験が精神健康に対して与える悪影響は、いじめ加害経験を持たない群に限られていた。過去のいじめ加害経験がある場合には、被害経験がある群で満足感、自信、社会的な支えの強さ感が高くなることが示された。このことは、いじめ被害経験がある場合に、他者に対するいじめを行うことが結果として精神健康を保つことになってしまうという可能性を示す。このような傾向があるとなれば、それが全体としてのいじめ件数増加にも繋がっているのかもしれない。

精神的疲労度に関しては健康度ほど複雑ではなく、加害経験がない場合に、被害経験がある群で精神的コントロール感が強く、社会とのつながりの不足を感じているという結果が得られた。これは前項で触れた、いじめ加害経験のみを持つ群が感じていた疲労感と類似しており、加害にしる被害にしる、いじめに関わる経験が共通にして持つ長期的な影響と考えられる。ただし、いじめ加害、いじめ被害による疲労感は加算的ではなく、両方の経験があるからといって、片方しか経験がない場合に比べて強い疲労感を感じるということは見られなかった。

5. おわりに

本研究では学生の精神健康度と精神疲労度と過去の経験の関係を調べ、過去にいじめに関する経験を持つことが大学生の精神状態に主にネガティブな形で影響しうことを示した。ただし、いじめ加害経験は必ずしもネガティブな影響のみを与えているわけではなく、学生の過去の経験に関する自己評価の複雑さも示された。

本研究はデータ数がやや少なく、過去の経験と現在の精神状態との関係も間接的に示すことに留まっている。今後は対象者を増やすこと、対象者の性格特性などとの関連を明らかにすること、さらに現在の修学状況などとの関係を調べることなどの展開が必要と考えられる。また、調査対象とする大学を増やすことで文系と理系の違い、地方と都市部の違いなども明らかにしていく必要があるだろう。

参 考 文 献

- 1) 文部科学省初等中等教育局児童生徒課：平成25年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について、2014
- 2) 岡安孝弘, 高山巖：中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス, 教育心理学研究, 48-4, pp.410-421, 2000
- 3) F.T. Benedict, P.M. Viver, and A. Gjelsvik : Mental Health and Bullying in the United States Among Children Aged 6 to 17 Years, Journal of Interpersonal Violence, 30-5, pp.782-795, 2015
- 4) A. Sourander, P. Jensen, J.A. Rönning, S. Niemelä, H. Helenius, L. Sillanmäki, K. Kumpulainen, J. Piha, T. Tamminen, I. Moilanen, and F. Almqvist : What is the early adulthood outcome of boys who bully or are bullied in childhood? The Finnish "From a Boy to a Man" study, Pediatrics, 120-2, pp.397-404, 2007
- 5) F.V.A. van Oort, K. Greaves-Lord, J. Ormel, F. C. Verhulst, and A. C. Huizink : Risk indicators of anxiety throughout adolescence : the TRAILS study. Depression and Anxiety, 28-6, pp.485-494, 2011
- 6) W.E. Copeland, D. Wolke, A. Angold, and E.J. Costello : Adult psychiatric outcomes of bullying and being bullied by peers in childhood and adolescence, JAMA Psychiatry, 70-4, pp.419-426, 2013
- 7) Y-Y. Chen and J-H. Huang : Precollege and In-College Bullying Experiences and Health-Related Quality of Life Among College Students, Pediatrics, 135-1, pp.18-25, 2015
- 8) M.K. Holt, J.G. Green, G. Reid, A. Dimeo, D.L. Espelage, E.D. Felix, M.J. Furlong, V.P. Poteat, and J.D. Sharkey : Associations Between Past Bullying Experiences and Psychosocial and Academic Functioning Among College Students, Journal of American College Health, 62-8, pp.552-560, 2014
- 9) 松本 圭, 伊丸岡俊秀, 近江政雄, 鶴谷奈津子, 石川健介, 渡邊伸行：過去のネガティブ・ポジティブなライフイベントが大学生の現在の精神健康に及ぼす影響, 心理学の諸領域, 3-1, pp.21-29, 2014
- 10) T.H. Holmes, and R.H. Rahe : The social readjustment rating scale, Journal of Psychosomatic Research, 11-2, pp.213-218, 1967
- 11) 氏原 寛, 小川捷之, 東山紘久, 村瀬孝雄, 山中康裕：ライフイベント, 心理臨床大辞典, 培風館, pp.46, 1992
- 12) 大野 裕, 吉村公雄：WHO SUBI 手引き 第2版, 金子書房, 2010
- 13) J.F. Sigurdson, J. Wallander, and A.M. Sund : Is involvement in school bullying associated with general health and psychosocial adjustment outcomes in adulthood?, Child Abuse & Neglect, 38, pp.1607-1617, 2014